

なぜ”こうふく”をまちづくり戦略の中心に据えるのか？

- リニア中央新幹線の開業は、甲府の未来を考える大きな転換点です。本戦略では、この機会をきっかけに「人が住み続けたい、関わり続けたい都市をどうつくるか」を考えます。
- 人口減少や価値観の多様化が進むこれからの時代において、都市の魅力は、人口規模や経済規模、施設の量だけで測られるものだけではありません。人が「ここで暮らし続けたい」と思えること、「この地域に関わり続けたい」と感じられること、そして「ここで新しい挑戦をしてみたい」と思えること。こうした実感の積み重ねこそが、これからの都市の持続性や魅力を支える基盤になると考えます。
- 本戦略では、この状態を表す言葉として”こうふく”という概念を掲げています。
- ここでいう”こうふく”とは、行政が一つの理想の暮らし方を示すものではありません。自然環境や都市空間、人との関係、仕事や挑戦など、地域の中での多様な体験や関わりの中から、それぞれの人が感じるものです。
- 本戦略は、こうした多様な”こうふく”が地域の中で生まれ、広がっていく環境を整えることで、人々の関わりの中から新しい価値や文化が生まれ続ける都市、すなわち「こうふく文化醸成都市圏」の形成を目指します。
- そのために、生活、産業、観光、交流など様々な分野の取組を”こうふく”という視点でつなぎ、分野を越えた相乗効果を生み出していきます。

触媒としての“こうふく”

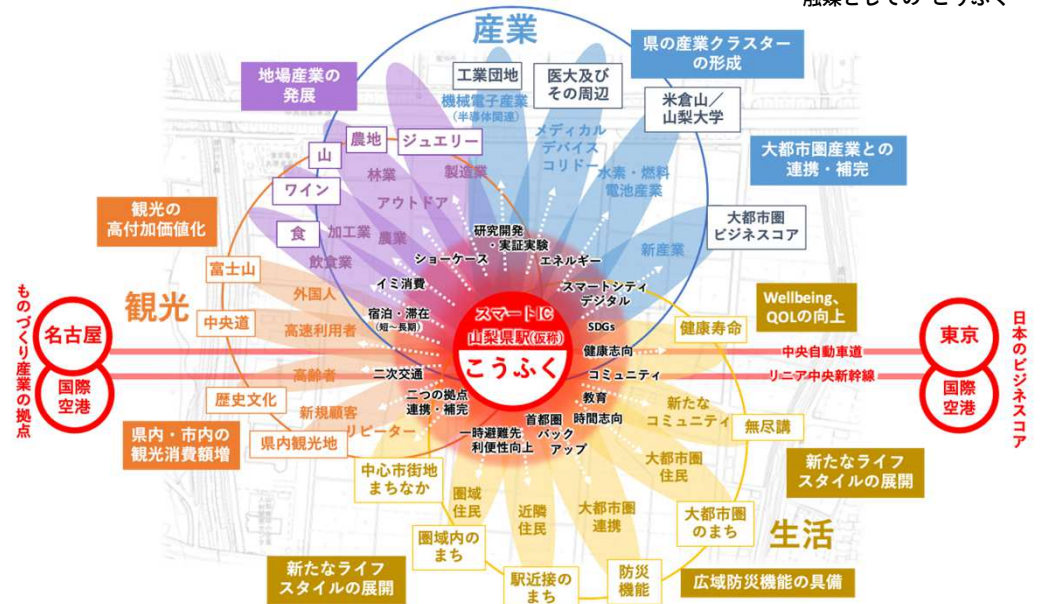


図 様々な分野の取り組みの触媒となる“こうふく”

二つの拠点から“こうふく”の循環が生まれる

- 甲府には、性格の異なる二つの拠点が 있습니다。

甲府駅周辺	歴史や文化、日常の暮らしが積み重なってきた「成熟を育む拠点」として、地域の文化や関係性の中から、深みのある”こうふく”が生まれる
リニア駅周辺	新たな交流や挑戦が生まれる「未来を拓く拠点」として、新しい人や活動が交わる中から、新しい”こうふく”が築かれる

二つの拠点から広がる、こうふくの循環

- また、本戦略では、”こうふく”が生まれる過程を「体感・関係・創発」という三つの要素で捉えています。

体感	自然環境や都市空間、文化や暮らしの魅力を実際に感じることで、山々に囲まれた盆地の風景や、歩いて過ごすまちなかの時間などの体験は、人が地域に愛着を持つきっかけになる。
関係	人と人、人と地域とのつながり。暮らす人、働く人、訪れる人など、多様な関わり方を持つ人々の関係が重なり合うことで、地域は人が関わり続ける場となる。
創発	こうした関係の中から、新しい活動や事業、文化が自然に立ち上がること

- この二つの拠点で生まれた活動や関係は、都市の中を行き来しながら重なり合い、新しい体験や挑戦を生み出していきます。
- この循環が繰り返されることで、都市の中に経験や関係が蓄積され、地域の魅力や文化が育まれていきます。その結果として、住み続けたい都市、関わり続けたい地域、新しい挑戦が生まれる都市が育っていきます。

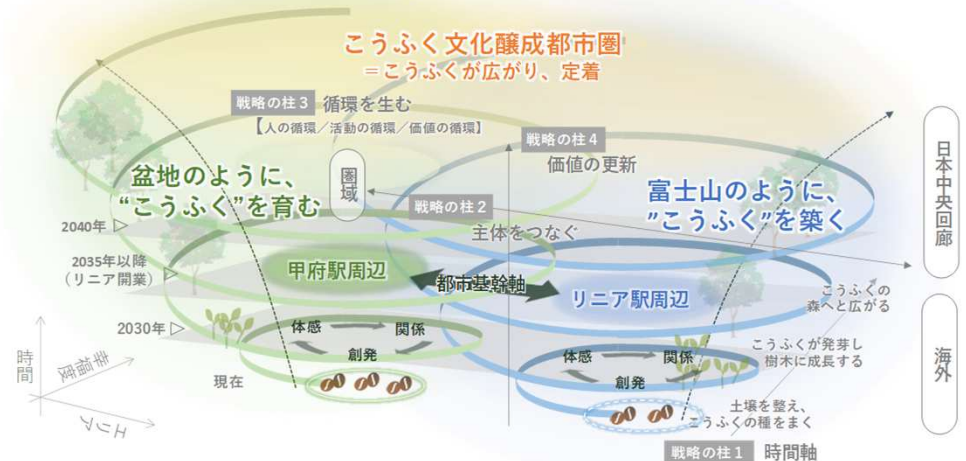


図 二つの拠点を核に、「体感・関係・創発」の循環から“こうふく”が広がる都市構造

第1章 リニア新時代のまちづくりの背景

- リニア中央新幹線の整備は、本市や本県にとって単なる交通利便性の向上の話ではなく、首都圏や中京圏と時間的に近接することで、人の流れや産業、地域との関わり方が変化し、都市の将来像そのものを問い直す転換点となる。
- 本戦略では、リニア駅前を単なる都市開発の対象敷地として捉えるのではなく、甲府・山梨がこれから何を価値として選び、どのような未来を築くのかという問いに対する答えを 公民連携で考える場として捉える。
- そのため、リニア駅前エリアは人や活動を引き寄せ、新しい関係や価値を生み出す触媒としての役割を担い、その作用を都市全体へ広げながら、甲府の未来を形づくるまちづくりの方向性を示す。

第2章 戦略が目指す都市像

- 本戦略が目指す将来像は、甲府・山梨に住み続けたい、関わり続けたいと思える都市をつくることである。
- 人口減少社会において都市の持続性は人口規模の拡大だけでは測れない。人々がこの地域で暮らし続けたい、あるいは様々な形で関わり続けたいと感じること、その実感の積み重ねこそが都市の未来を支える基盤となる。
- 本戦略では、この状態を実現する都市の姿を「こうふく文化醸成都市圏」として描く。これは、地域に関わる人々が自らの価値観や関心に応じて多様な関わり方を選び取り、その積み重ねによって地域全体の価値が育まれていく都市圏の姿である。

第3章 現状分析と内発的発展の必要性

- リニア開業による広域的な都市間競争の進展を踏まえ、本市や圏域の課題を「選ばれる地域となるための構造的課題」として整理した。
- 人口や経済指標は結果として現れるものであり、今後は「どのような時間や体験を過ごせるか」といった質的価値が重要となる。その中で、本市には、①“こうふく”が実感されにくい都市構造、②地域資源が価値として統合されていない構造、③外部依存型の発展構造、という3つの課題が存在すると考えられる。
- リニア新時代においては、外部から人や投資を呼び込むだけでなく、地域の内側から価値を生み出し、それが外部との関係を通じて循環・拡張していく「内発的発展」の視点が重要となる。

第4章 二つの拠点を核とした都市構造

- 本戦略の骨格となるのが、甲府駅周辺とリニア駅周辺という二つの拠点を核とした都市構造である。
- 甲府には、既に都市機能や文化、日常の営みが重なる甲府駅周辺と、広域交通結節点として新たな都市形成が可能なりニア駅周辺という、性格の異なる二つの拠点が存在する。
- 本戦略では、この二拠点を対立させるのではなく、それぞれの特性を活かしながら連携させることで、人・活動・価値が循環する都市構造を形成する。
- 両拠点を結ぶ空間は交通のみならず、沿線のまちづくりや公共空間の連なりとなる都市基幹軸を位置づけ、都市の骨格として機能させていく。

第5章 不変の価値観

- 戦略では、都市の将来を考える上での共通の価値軸として“こうふく”を位置づける。
- ここでいう“こうふく”とは、暮らし・産業・自然環境・人との関係など、多様な価値が重なり合いながら成熟していく状態を指す。
- それは行政が一方向的に設計するものではなく、人々の体験や関係、挑戦の積み重ねの中から生まれ、地域の中で共有されながら育まれていくものである。
- この価値観は、都市の将来像やまちづくりの方向性を考える際の基盤となる考え方である。

第6章 まちづくり基本理念

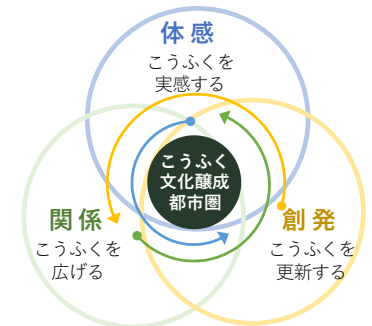
- 第5章で示した価値観を都市空間の中で具体化する考え方として、本戦略では、二つの拠点それぞれの特性を活かしたまちづくりの理念を示している。
- リニア駅周辺の理念は「富士山のように、こうふくを築く」である。富士山が長い年月をかけて形成されてきた山であるように、リニア駅周辺のまちづくりもまた、短期的な開発や一時的な賑わいを目的とするものではない。人々の活動や関係性、新しい挑戦が積み重なりながら、時間をかけて新しい都市価値を築いていくことを目指す。
- 一方、甲府駅周辺では「盆地のように、こうふくを育む」という考え方のもと、歴史や文化、日常の暮らしの中で関係や体験を積み重ねながら、地域の中にこうふくを育てていく。
- この二つの理念が相互に補完し合うことで、二つの拠点がそれぞれの役割を担いながら、都市全体の価値を段階的に高めていくことを目指す。

第7章 戦略の柱

- 基本理念を具体的な行動へと展開するため、本戦略では四つの戦略の柱を設定する。
 - 柱1 時間とともに価値を育て、築く（時間軸）
 - 柱2 内と外の人・組織をつなぐ（主体）
 - 柱3 二つの拠点を活かし、循環をうむ（都市構造）
 - 柱4 拠点を起点に、圏域へ価値を更新する（スケール）
- これらの柱は独立した政策分野ではなく、相互に重なり合いながらこうふくを起点とした価値循環を動かす行動原理として機能する。

第8章 プロジェクトによる戦略の実装

- 戦略は具体的なプロジェクトを通じて実装される。その際の基本となる作用が「体感・関係・創発」である。
- 地域の自然や文化、公共空間などを通じて価値を実感する体感が、人と人、人と地域のつながりである関係を生み、その関係の中から新しい活動や事業が自然に立ち上がる創発が生まれる。
- 甲府駅周辺では「盆地のようにこうふくを育む」都市活動を積み重ね、リニア駅周辺では「富士山のようにこうふくを築く」実装の場として価値を積み上げる。この二拠点の循環が広がることで、最終的にこうふく文化醸成都市圏へと発展していく。



(9章は省略)